

装備の悪さ・装置の悪さ

国土学アナリスト
大石久和
Hisakazu Obishi

原丈人氏は最強のベンチャー事業投資家と言われているが、最近『公益』資本主義―英米型資本主義の終焉（文春新書）を著わし、株主資本主義からの脱却・脱出を説いている。このなかで、彼はアメリカでは長期投資が行われなくなっており、短期の利ざや稼ぎのようなことばかりの国となったから、これを範としてはならないと警告している。

何でもアメリカ流が優れているとする風潮のあるわが国の経営者への重大な忠告である。きちんと実務をやってきた氏の主張は、観念論的な議論でないだけに説得力がある。彼はわが国の次世代を担う逸材であると感じている。

ここでの紹介は、原丈人氏の父親である原信太郎氏の逸話である。彼の父はサラリーマンであったが、随分ユニークな人であったようである。鉄道模型の製作・収集には異常とも言える執念でのめり込んでいたらしい。二〇一二年に横浜駅近くに「原鉄道模型博物館」が開設されており、彼が収集し製作した鉄道模型を見ることが出来る。

その原信太郎氏は、東京工業大学の機械工学科に進み、大学に自動車部を創設したと言うが、その頃、トヨタとフォードのエンジンを比較して、あまりの技術力の違いから「アメリカと戦

ったら必ず負ける」と確信したというのだ。このことから「戦争反対」を口にしたために、学士なのに二等兵で徴集されたという。

具体の事実を目を向けないまま、むしろそれから目をそらして政策判断をしてきた結果が先の敗戦だったのだが、現在の日本ではそれが克服されたと言いたいところが情けないのである。むしろ戦前と変わらないというのが真実なのだ。

装備と装置

わが国でのモータリゼーションの爆発は、昭和三十年代～四十年代にかけてのことだったから、戦前には自動車は一般には普及しておらず、軍や金持ちだけの移動手段であった。したがって大量生産の必要がなく、その技術もなかったから、アメリカとの開戦時におけるわが国の自動車の生産能力はアメリカの百分の一というレベルだった。

これだけでもとんでもない格差なのに、その少ない生産台数の自動車のエンジンが、原信太郎氏の指摘ではフォードに比べてお話にならない程度のものであったというのだから、アメリカと戦端を開くことなど絶対に避けなければならぬというのだから、政策判断の最上位になければならなかったのだ。対米戦など悪夢中の悪夢の

世界に押し込んでおかなければならなかったのである。

生産能力が不足していても、生産したエンジンが劣っていても、日本人の精神力でそれをカバーできるのだと彼我の実力差を精確に認識しようとしてこなかったのが戦前だった。装備整備の軽視・精神力の異常信仰は、国民にこれ以上の負担を課すことはできないという戦前の絶望的な貧困状況を吐露した別の表現だったと考えている。

その情けない状況をいくつか観察してみよう。

《戦車》

靖国神社の遊就館には、日本陸軍の「九七式戦車」が展示されている。この戦車は戦前の日本の戦車の中では「最も厚い装甲」を持っていたようだが、それがいかに貧弱だったかを当時の各国戦車の装甲厚（重量も）との比較を見てもみよう。

日本九七式戦車 二五^{リットル}・一五^ト

ドイツタイガーII改良 二五〇^{リットル}・七〇^ト

イギリスクロムウェル 七六^{リットル}・二八^ト

アメリカT25 九〇^{リットル}・三五^ト

敵からの機銃掃射を正面で受ける装甲にこれだけの差があれば、戦いなどなるはずがない。

戦車は高速で走行できることが不可欠だから、強力なエンジンがないのなら、総重量を軽くするしかない。結果として装甲厚も薄くせざるを得なかったのだ。

《主力歩兵銃》

第二次世界大戦時に日本の歩兵に与えられた銃を「三八銃（三八式歩兵銃）」と言ったことはよく知られているが、この三八の意味が明治三十八年のことだとは若い人は知らない。この銃は、日露戦争を戦っていた明治三十八（一九〇五）年に制式となり採用が認定されたのだ。

その銃が、そのほぼ四〇年後の一九四一年からの日米戦の主力歩兵銃だったのである。いくら技術的進歩が緩やかだった戦前のことだと言っても、あまりに古過ぎはしないか。これを持たされて戦地に赴いた先輩たちの苦勞がしのばれる。これ一つ見ても、やはりこの戦争は無謀だったというのである。

現在の装置

いまわが国は、ドイツやアメリカなど先進各国と経済的に競争しているが、その武器はもちろん戦車などではない。その競争力を規定しているのは、各社の持つ技術力であり、企業統治

のシステムであり、経営のためのITの使いこなしであり、経営者の資質であったりするのだが、これだけではない。

個々の企業や個人の努力では、提供することができない「財やサービス」というものが社会には必要で、それがインフラというもので社会全体を支えている。社会が進化するにつれ、こうしたインフラはメニューが多様化し重要性を増していく。

つい最近まで、町中にWi-Fi環境を整備する必要など全くなかったのだが、いまでは必須のアイテムだ。インフラは、制度と装置から成り立つ。時代の変化に応じた制度改革が必要で民法は時代遅れの典型だが、憲法もそれに負けてはいない。

日本人が忘れがちなのは装置のインフラである。日本はこの二〇年で世界のGDPの一八％程度の国から、わずか五・九％の国に転落してしまったが、その根本原因の一つが「交通インフラ」の先進国との相対的整備水準の低下にあることの指摘がまったくない。

「日本人の忘れ物」の典型が、装置インフラのなかでも経済成長に直結した道路空港港湾などの交通インフラであることを、この指摘のなさが証明している。